高等教育研究センター
かわらばん
冬号
名古屋大学
高等教育研究センター
ニューズレター第37号

大学院共通教育を考える

名古屋大学は昨年、大学院共通教育の実施に向けて動き出しました。背景は何か、なぜ「共通」なのか、どのような教育形態がよいのか。国内外の事例もふまえて整理してみたいと思います。

大学院の実情

行政的要請は1つの理由でしょう。たしかにここ数年の推進ぶりには目ざましいものがあります。昨年も、中教審答申、大学院教育振興施策要綱の改訂、リーディング大学院事業発足などがありました。

でも、ここで見ていきたいのは、もう少し本質的な要請です。目を向けるべきは、大学院生数の増加による意識の変化や学生の学習履歴に多様性が増したことです。学部段階における教養教育解体の影響も指摘されています。従来の大学院教育のままでは修了者の水準を保てない。そう感じている関係者は少なくありません。

改革の理念

他方に、知識生産のあり方が変容し、また知識基盤社会を牽引する人材養成が大学院に求められるようになったという社会の変化があります。この変化は世界的なもので、大学院教育改革もまた、各国が模索、試行しています。

知識基盤社会は、異分野や別組織に所属する人々が、特定の問題解決、課題達成のために知力を結集することによって実現強化されると考えられています。このことは「モード2型知識生産」や「オープンイノベーション」というキーワードで語られてきました。

しかも、知的生産は学術界だけのものではなくなりました。さまざまなセクターが知識基盤社会を牽引する人材を必要としています。イノベーションを起こせるだけでなく、イノベーションが起きやすい社会へと変革できるような人材こそが求められているとも言えます。

新たに求められる能力

このような状況下で知的生産に携わる者には、広い視野をもつこと、異分野をつなぐこと、異なる状況や複数の役割に対応することが不可欠です。大学教員を例にとれば、特定の学問分野の一員としての立場、大学に雇用される者としての立場、社会的状況に対する専門家個人としての立場などがあり、協働する相手も様々です。いくつかの顔を使い分けつつ、それらが統合された新たなアイデンティティを築いています。

専門知を多様な文脈で生かすために必要な技能をまとめたものに「移転可能スキル」があります［かわらばん2008年夏号参照］。昨今の大学におけるアウトカム指向、コンピテンシー指向と相まってか、現在では欧州科学財団やOECDもこの語を用いて人材育成のあり方を議論しています。

日本の大学院教育では

院生増加と多様化を踏まえた研究室教育の補完、従来の学部教養教育の代替、さらには移転可能スキル育成と、日本の大学院教育に期待されるものは多層的です。教育内容に即して言い換えるならば、つぎの3点に集約できます。

① 専門家としての生き方や判断を支えるような教養教育、キャリア教育

② 書く、話す、聴く、議論する、論理的に考えるなどの基礎スキル補強と、専門家レベルへの向上のための教育

③ 異分野交流、問題解決、協働などの経験を与えることによる教育

教育形態はいかに

国内外にすでに取り組みを始めた大学があります。講義やセミナーだけでなく、インターンシップ（先方は企業とは限りません）やプロジェクトを通じた学習、ワークショップが積極的に取り入れられています。

特筆すべきは、これらの教育が学問分野を超えて提供され、ときに社会との接点ももって、院生が異分野交流を経験する機会となっている点です。「共通」教育である意義がここにあります。

多様な知を結集して問題解決に取り組んだり、それを追体験できたりする参加型の学習形態となっている点も注目に値します。スキルや意識の育成には、経験が欠かせないのです。

ただし、スキルや意識は定着を図る必要があります。研究指導を含めた専門教育において繰り返してスキルが活用されることは専門性の発揮につながります。専門教育と共通教育を両輪として設計することが肝要です。

また、大学院共通教育では「担当教員が院生とともに学ぶ」という面がより強まると言われます。教員が専門とする分野について教授するわけではないからです。一専門家として期待された院生が、伸びやかに成長していくであろうことは想像に難くありません。一方の教員にとっても、知的な刺激に満ちた空間が待っていることになります。

うまくすれば大学や知的生産システムを活性化する起爆剤になる大学院共通教育。楽しみな挑戦が始まろうとしています。

（齋藤芳子）

POD2011体験記

平成23年10月26日～30日に、米国アトランタにおいて開催されたProfessional and Organizational Development Network in Higher Education（高等教育専門組織開発ネットワーク）年次大会に参加する機会を得ました。本大会には、例年、多くの国々の大学から教職員が参加しています。そのため、ＦＤやＳＤに関する各大学の取り組みについて情報を収集したり、意見交換したりすることができます。

私は、シラバスに関するセッションに参加しました。実は、日米のシラバスには大きな違いがあります。日本のシラバスは、アメリカでは、カリキュラムガイドなどと呼ばれているものです。日本では、１科目あたり、Ａ４サイズで２分の１ページ程度が割り当てられ、それらを冊子にまとめています。しかし、アメリカのシラバスは数十ページあり、初回のイントロダクションの授業で学生に配布されるものです。毎回の講義の内容や参考文献が詳細に記述され、成績評価の方法も具体的に書かれています。セッションでは、理想的なシラバスの構成、シラバスの外部公開の必要性とリスク、シラバスの承認方法、シラバスの著作権・所有権、などが議論されました。

他にも、ファカルティ・ディベロップメントや、ティーチングアシスタントについてのセッションなどにも参加しました。５日間という短い研修ではありましたが、様々な国の方々とコミュニケーションをとり、多くの知見を得ることができたのは、私にとって大きな財産となりました。今回の研修を契機に、日本の大学の現状を批判的に考察していきたいと思います。

（学務企画課　船戸祥史）

かわらばんへの皆さまのご意見・ご感想を裏面のEメールアドレスまでお寄せください

高等教育が国境を超えるとき

トリシア・カヴァデール＝ジョーンズ（客員准教授）

世界各国の大学で留学生が増えており、さまざまなオリエンテーションやサポートが提供されています。その内容からは、各大学がどのような方針で留学生に対応しているかを知ることができます。筆者が日本、中国、イギリスの大学の実態調査をしたところ、つぎのような特徴がみられました。

［イギリス］ウェブ情報が豊富で、到着前から準備可能である。正課が始まる前の準備プログラムが充実している。通常の学生生活が始まった後のグループミーティングも活発である。

［日本］学習や生活に関する説明や実用的な情報提供を重視している。ウェブ上での情報提供も行うが、紙媒体の情報提供をより好む傾向がある。入学式後に、留学生全体に対して説明会が実施される。

［中国］オリエンテーションよりも政府通達が優先される。ウェブ上の情報提供が少ないなどの事情から、種々の手続きや日々の生活において、留学生仲間の互助が不可欠である。

十分な情報提供はなされるべきでしょう。ただし、異なる文化を背景にもつ留学生に対して、文化適応を一方的に押し付けている可能性にも留意が必要です。たとえば、儒教の伝統文化をもつ東アジア系留学生は欧米の教職員から、教科書通りの講義を好む、暗記に依存する、議論に加わるのが苦手である、同郷の留学生どうしでばかり集まる、などと否定的にみなされることがあります。もちろん、他の異文化間でも事情は同じです。

わたしたち大学関係者は、外国人留学生に固定観念を抱きがちであること、彼らが外国語を使って学習していることを忘れがちなのです。その結果、留学生は学習スキルあるいは知的能力が不足しているとみなされることになります。しかも、わたしたち自身の思い込みを検証するのは容易ではありません。

高等教育が国境を越えるとき、それは人の移動ではなく、異文化適応でもなく、豊かな異文化交流が成立することを指すのだと思います。（翻訳　近田政博）

Higher Education Glossary
高等教育にまつわる用語集

インフォーマル学習
Informal Learning

インフォーマル学習とは、組織的系統的に教育が編成されておらず、学習目標や期待される成果も設定されないなかで、学習者の視点からはほぼ無自覚になされるような学習のことです。多くは日々の職業経験や生活経験から個人が学習することを指します。

教育や学習は正規の教育機関以外の場所・形態で行われるものが多々あります。その代表的な場所は職場です。職務に従事するための前提となる知識・技能は、多くの場合、入職前の正規教育機関で形成されます。入職後は組織的・計画的な教育訓練が提供される場合もありますが、それらの機会は限られています。多くの場合、職務に従事する過程で個人が経験的に知識や技能を習得しています。知識・技能の内容は職務に直結するものばかりでなく、職場の慣習・規律等に関連するもの、人間関係に関連するものなど多様です。組織的・系統的なものではなく、多様で雑多なものになる可能性があります。とはいえ、知識・技能の内容や水準は職務を遂行する上では有効であり、しばしば不可欠なものです。正規教育機関での学習活動だけでは獲得できないものもありえます。

このような知識・技能を積極的に評価しようとする取組は近年注目され、活発化しています。OECD や EU 等でも政策提言としてまとめられており、関連する研究成果も発表されています。その背景には、職務遂行に有効な知識や技能へのニーズの高まりの中で、正規教育機関以外の学習の有効性や重要性が着目されていることがあります。また、職業資格をもたない人への救済の意味もあります。彼らは職業をはじめ各種の活動に従事する過程で一定の知識や技能を習得しているため、それを評価して資格取得を促すことが社会政策的観点からも重視されています。

ただし、インフォーマル学習による知識や技能の内容はしばしば雑多であるために評価が難しくなります。また、それが正規教育機関での学習と対等とみなせるかどうかは微妙な問題で、雇用主を含めた社会一般の理解を深めることが必要になります。さらに、インフォーマル学習は低コストで実施できるため、教育・訓練関係の予算縮減の圧力を招きかねない点にも留意が必要でしょう。（夏目達也）

読んでおきたい この1冊
Great Books on University

『絵画をいかに味わうか』

ヴィクトル・I・ストイキツァ著　岡田温司監訳
平凡社　2010年

本書を紹介しようと考えたのは、絵画作品に関する専門的な考察というよりも、「紆余曲折―知的自伝の試み」と題された冒頭の 50 ページほどの部分のためです。そこでは現代を代表する美術史研究者である著者が、1949 年ルーマニアのブカレストに生まれ、1989 年にパリで博士論文の審査に至るまでの波乱に満ちた 40 年間を静かな語り口でたどっています。1960 年代に故国から西欧の大学へ留学した彼の「周縁的な」まなざしにより、当時の大学の同僚や教員たちの姿が描かれています。

このような自伝を読むことの魅力のひとつは、私のような年齢に達した者にとっては、20 歳前後に過ごした自己形成期の繰り返しえない貴重な時間を、ほかの人の生涯を借りながらではあっても、再び経験することができることにあると思います。また、まさにこうした時間の真っただ中にある者にとっては、今直面している課題、さまざまな偶然の出会い、時折訪れる重要な転機における選択、そしてその時間の意味について、もちろん直接参考にはならないとしても、幅広い視野から教えてくれるところにあるのでしょう。そして、1960 年代のヨーロッパの大学と現代日本の大学との間には数々の大きな変化や差異があるにもかかわらず、大学が果たすべき役割は本質的には変わっていないことに気づかされます。（木俣元一）

高等教育研究センタースタッフ（2012年1月現在）

センター長　木俣元一　専門領域：西洋中世美術史
教授　夏目達也　専門領域：高等教育学、技術・職業教育論
准教授　近田政博　専門領域：比較高等教育学、学習支援
准教授　中井俊樹　専門領域：大学教育論、高等教育マネジメント
助教　齋藤芳子　専門領域：科学技術社会論
研究員　東　望歩
豊田　哲
客員　トリシア・カヴァデール=ジョーンズ（英国・ポーツマス大学）
金子元久　（国立大学財務・経営センター）
加藤かおり　（新潟大学）
山内乾史　（神戸大学）

名古屋大学高等教育研究センター

〒464-8601　名古屋市千種区不老町
Tel 052-789-5696
Fax 052-789-5695

E-mail　info@cshe.nagoya-u.ac.jp
URL　http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/

『かわらばん』名古屋大学高等教育研究センター　ニューズレター冬号（第37号）2012年1月発行
編集長　木俣 元一　編集幹事　齋藤 芳子